が最も多く，ついで10歳代，30歳代の順であった．原因別では男女とも圧倒的に交通事故が多く全体の半数近くを占めていた．顎骨骨折部位では6：1で上顎骨よりも下顎骨が多く，好発部位は正中部が最も多く，ついで隅角部，犬歯部，関節突起部の順であった．

これらのうち約70%に観血的整復固定術を施し，ワイヤーあるいはプレートによる骨縫合と顎間固定の併用により良好な結果を得ている．また入院期間は最長140日，最短2日で平均約40日であった．

12. 兄妹に発症した腰椎分離症の2例

（第二病院整形外科）

○高橋　厚子・菅原　幸子・大野　博子・石上　宮子・橋本　聡・佐藤　裕・山崎　恭子・大山　昌也・林　美恵子

腰椎分離症は日常よく遭遇する疾患であるが，その原因について，所説あり，未だ確定的なものはない．今回，我々は兄妹で発生した腰椎分離症を経験したので，文献的考察を加え報告する．

（症例1）兄，31歳．職業は農業．昭和62年6月7日両股間節痛，両肩関節痛を主訴に来院．発熱，RA（＋），RAHA（1280），BSG 1時間値50，RAの診断にてPredonine, NSAIDで治療を行った．6～7年前より時々誘因なく腰痛があり，X線により第5腰椎分離症を認めた．

（症例2）妹，27歳．職業は主婦．昭和63年3月29日，3月中旬より誘因なく出現した腰痛を主訴に来院．運動痛，右下肢痛があり，X線により第4腰椎分離症を認めた．

13. 尋麻疹治療の現況

（皮膚科）

○山口　令子・山下　典子・肥田野　信

慢性尋麻疹における各種薬剤の治療効果を検討した．第1選択とされるH_1受容体拮抗剤単独で皮疹の出現を完全に抑制するのは困難なことが多く，2～3種のH_1受容体拮抗剤を併用したり，H_1，H_2受容体拮抗剤の併用療法が有用であった．ケトチフェン，オキサトミド，トラニラスト等の抗アレルギー剤の効果に関しては，抗ヒスタミン作用を併せもつ前者2剤はH_1受容体拮抗剤とほぼ同程度の有用性が得られたが，トラニラストの効果は症例により一定しなかった．個疹が24時間以上継続するものは，上記の薬剤治療に抵抗することが多かった．

14. T3自己抗体の物理化学的性状の解析

（ラジオアッセイ検査科）

○山口　伸之・小池　幸子・青山　昭・名執　由紀・日下部きよ子・出村　黎子・出村　博

甲状腺機能検査でT3のみが異常高値を示した4症例について抗T3抗体の存在を疑い，抗体の検索およびその性状について解析を試みた．4症例中3例は抗甲状腺剤（PTU）で治療中の甲状腺機能亢進症で1例は糖尿病であった．各症例の血清と^{125}I-T3との結合率は89.2～96.0%と正常血清の16.4%に比べいずれも高く，電気泳動法で結合蛋白分画はγ-globulin分画に分布し，Sephadex G-200によるゲルろ過ではIgGに一致した．血清と^{125}I-T3をインキュベートし，大量のcold T3を添加しゲルろ過を施行した結果，結合分画の放射活性は著明に減少した．DEAEセルロースにより精製した血清IgGのT3に対する親和定数は極めて高く，T3キット第一抗体に相当した．

15. 奇異行動により発見されたインスリノーマの1例

（糖尿病センター）

磯野　悦子・松本　博・小川百合子・植田　太郎・平田　幸正

症例：56歳，女性．昭和60年（53歳）より徘徊，家の中をちらかすなどの異常行動および空腹時の傾眠傾向が出現．昭和63年4月，脳神経科を受診し，CT，脳波の検査を受けたが異常はなかった．9月24日より，傾眠傾向が続き，ほとんど摂食しない状態であったが，早朝，痙れんと意識消失を来し，当院神経科を受診．受診時24mg/dlと低血糖を認めた．ブドウ糖の点滴で意識回復した．空腹時血糖25～40mg/dl，IRI　18.7～23.8μu/ml（BS/IRI＝1.05～1.33）でインスリノーマと診断された．なお，インスリン抗体は陰性，超音波，CT，血管造影で膵頭部に約12×13mmの腫瘍が認められた．以上，精神症状によって発見された